

らだが、ここで(6を指し)おじいさんやおばあさんに悲しいわけを話したか。

○ 話しません

悲しい顔をするだけで話しませんでした。

わけを話したのはどこかな。

○ 七番

あしたは、かぐや姫がわけを話すところ、七番をやります。しっかり勉強して下さい。

七 よ む

また十人の人間に読んでもらいます。昨日のように大きい声でゆっくり読みましょうね。

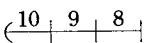
よむ 十人(八分)

あんまりうまいから、もう一度読んで下さい。あしたからは、みんな読みません。長いからね。

よむ 十人

本をおいて下さい。これでみんな読んだね。どの人もどの人も、みんなしつかり読めた。えらいね。聞く人もとてもよい姿勢でよかったです。

今日帰ったら、勉強したことを考えながら書いてくる



みかどんけらい  
天人たち  
天へ

注 原井の子どもたちの読みを聞いていると、頭が下がる思いがする。

句読点で、きりっと口を結んで、ゆっくり、大きい声で、はっきりと読んでいる。

しかも、どの子もどの子も、そのように読む。弱い読みの子がない。又、全年年に徹底しているのは驚異である。

師は、「私は先師の道をたどって歩み続けているだけである。私が考えたものは、手引と、第三次指導と、入門期の句読点の指導ぐらいのものである。私が若しノーベル賞をもらうとすれば、句読点の指導だろう」と話しておられたことを思い出した。

これ程、効果のあるものとは知らなかつたので、驚いた。

五十年大会で初めて、ノーベル賞の値打を確認したのである。

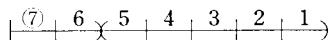
この長文を読んで、一回目より二回目と、さらに教室が引きしまり、微塵のゆるみもない。深く耕してやると、読む毎に深まるのである。

のだったね。そしたら、あしたもよくわかるよ。道具、おじぎしたら忘れないで持つて帰りなさいね。

机間巡視	三分
四、かく	六分
五、よむ	二分
六、とく	十五分
七、よむ	十六分

### 板書事項

光つて いる 竹  
小さな女の子  
きれいな かご  
つかいの もの  
かがやひめ  
か な し そ う な か お  
なく



### 第二次指導（三時間目）

子どもたち、早めに着席。教科書を開いて読み始める。

それじゃ本を置きなさい。

礼

さあ、昨日家に帰つてから、帳面に、先生がここに(黒板)書いたのを書いてみたか。

全員挙手

おお、みんな書いてくれたか。よかつたね。それだったら、とってもよくわかったでしょう。

さあ、今日も読みます。初めからみんな読むと、時間が足りなくなるから、四のところから読みます。四のところ開いて下さい。

四、その次五、その次開いて六、もう一つ七。

四から七まで読んでもらいます。

あなたから、あなたが四、あなたが五、あなたが六、あなたが七で、よつたりで読んで下さい。

つかり聞きましょうね。

## 一 よ む

### 二 と く

畑や竹やぶなど どっさりあって、さびしい所なの。  
帝が住んでおられた所は、さびしいところでしょうか、  
にぎやかなところでしようか。

○ にぎやか

にぎやかな所です。とってもにぎやかな所です。

日本で一番にぎやかな所です。そのような、帝の住んでいる所を何というの。

○ みやこ

答をうけられて「」するしをかかれ。つまり 村  
「みやこ」を図で示される。

黒板の右はしに

「」と書かれた

あなたも、あなたも、あなたも、あなたも、よつたりで読んでくれたが、とっても大きな声で ゆっくりと、とてもうまく読んでくれたね。よかつたよ。聞く人も、昨日もうまいと思ったが、今日も、もつとよい姿勢で、しっかり聞きましたね。よかつたよ。

竹とりのおじいさんのいるところは、にぎやかなところだろうか、にぎやかでないところだろうか。

○ にぎやかなところ  
にぎやかなところか。そうかな？

○ にぎやかでない  
にぎやかでない

にぎやかではありません。家なんかあんまりない所です。そういう所何というか。

○ 村です

こっちに一けん、こっちに一けん、こっちに一けん(黒板に、…の印で表わしそうつかない)。

都といいます。都というのは、とってもにぎやかな所です。そんなにぎやかな所に帝はいらっしゃるの。竹とりの翁の住んでいる所と、都とは、近いのだろう

おさらいの板書は、字の場合も、図の場合も、最少量であらわすのがコツである。また、おさらいの板書は、前時の縮図ではなく、本時の足がかりになるものである。それは、象徴的なものである。

か、それとも、とっても遠いところにあるのだろうか。

○ 遠いところ

遠い所にあります。とっても遠いのです。ずっと離れています。

竹とりの翁の家にいるかぐや姫は、とってもどういうお姫さまだったか。

○ やさしい

とってもやさしく、とっても美しいお姫さまでした。

どんなに美しいの。

○ 光り輝いて

光り輝くお姫さまです。ピカピカ ピカピカ ピカピカ光り輝いています。

やさしく、美しく、りこうで、光り輝くお姫さまだということを、遠い都にいらっしゃる帝に、誰が教えた?

教えた人あるの?

○ あります

そうかな。誰が教えたの。

○ おじいさんとおばあさんです  
おじいさんとおばあさんが、「家にはぴかぴか光るやさしい娘がいます」と帝に教えたかな。

「す」と帰りました。

日本で一番偉い方、その帝の使いでさえも会うことができなくて帰されました。帝の使いでさえ帰されました。ところが、こんどは帰されないものが来ます。誰？

○月の国の天人たちです。そこで、姫が、来る日が近づくと、あんなに光り輝いている顔がどうなつたの。

○泣きました。

泣きました。迎えに来る日はいつだつたか。

○十五夜のばん

十五夜です。十五夜が近づきました。かぐや姫泣きました。心配したのは誰だつたろう。

○おじいさんとおばあさん  
おじいさんとおばあさんです。そこで、おじいさんおばあさん、聞きましたよ。そのこと書いてあるのは何番目か。

○七番

おじいさんとおばあさんが聞きました。そしたら、どう答えたかわかるか。そこおさえてみなさい。

そこ「」のついたところ、答えたところともう一つ

あるよ。おさえてみなさい。  
「わたしは泣いているので『さ』います。」が一つ。  
「むすめを守つて下さい。」が一つ。  
二つありますよ。そこを書いて下さい。  
帳面を開いて、体を真直ぐにして書いて下さい。

### 三 や む

### 四 か く

「わたしは、もともと、  
月の国の中のものです。  
この十五やには、月  
の国からむかえが  
くるので、おわかれ  
しなければなりま  
せん。それがかなしく  
て、ないているので  
ござります。」

師の板書ここ  
のとき半数の  
子書き終る

ひめ——ふたりと板書  
かぐや姫がしくしく泣いているので、おじいさんと  
おばあさんが心配して聞いたのでしょう。  
その時、かぐや姫は何を言ったの。

黒板に○○を書かれ  
泣く何を言ったの。字、かな二つで言つたらえらくな。  
三人の子が、めいめいあてずっぽうなかなを二つ答える。  
師はそれをうけつけない。

(わと板書され)この下に何と入れるか。

○わた(まるつきりはずれた答なので別な子に、あなた)

○わか  
わかかな。もう少し助けてやるか。  
しと書かれる

○い  
違う  
違う  
もう少し

○り  
違  
違  
う

○い  
こつ  
こつ  
ちは誰が言つたの。

○かぐや姫が言いました

右へ 黄で  
ひめと板書

誰に言つたの。

○おじいさんとおばあさんに言いました

おじいさんとおばあさん、二人に言いました。

## 第一二 かぐやひめ〔二年〕

子どもたち「そうだった」という顔をする。こんな扱いで和やかになる。しかもわけを取扱うのが六とくの仕事。六とくのカギになることばを、このように出してこられたことに注目すべきである。

これを世間一般に行われる、ことばの遊びであるとみたら大きなまちがいである。

これは(後半の「」)誰が言つたの。むすめなんて言うな。

○ みかど

二年ぐらゐの力の弱い子は、よくこんな答をする。区分の大事な仕事。これを外すと後の仕事が難しくなる。

みかどが言つたのかな。帝はきいたのだよ。おしかつたな。

思いやりのことばをかけられる。力の弱い子の答の扱い方

みかど と黄で板書されて

誰が、帝にこういうことを言つたのでしょうか。

○ おじいさんとおばあさんとおばあさん おじいさんとおばあさんです。<sup>ふたり</sup>二人が言つたのね。

ふたり みかど の板書 黄

○ 「…………」  
かぐや姫にとつて一番つらいことが、ここに書いてあるんですよ。何?

○ お別れ  
お別れするのがとつても悲しいの。

おじいさんとおばあさんは、今まで、かぐや姫をどうしてくれたの?

○ かわいがつた

とてもとてもかわいがつてくれたの。小さいときから とってもとっても大事に大事に育てられたの。

そのおじいさんとおばあさんは、それを聞いて、これは大変と思いましたよ。びっくりしたおじいさんとおばあさんは、帝にお願いしました。お願いしたのは何。

○ 守ること

姫を守つて下さい。守るということは、姫を月に帰すことか、帰さないことか。

○ 帰さないこと

帝はその願いを聞いて、どうしたかな。

子どもたち「そうだった」という顔をする。こんな扱いで和やかになる。しかもわけを取扱うのが六とくの仕事。六とくのカギになることばを、このように出してこられたことに注目すべきである。

これを世間一般に行われる、ことばの遊びであるとみたら大きなまちがいである。

これは(前半の文を二区分されて) 1 こつちを 2 とします。  
2 ばんめ ここは 2 なくわけです。

泣くわけを話したのは 1 だろうか 2 だろうか たところです。

○ 月(月の国に、線をひかれる)  
月の国に生まれた人が、月の国に帰つて行くのが、なんで悲しいのか。自分の国に帰つて行くのがなんでそんなに悲しいの。喜ばなくてはならんのに。皆さんも家に帰るのは嬉しいでしょう。

○ 「…………」  
なんでもうちに帰るのに泣いているの。

○ 守りました  
自分で守りましたか。  
○ 家来をよこした  
家来をたくさんよこして守りました。  
明日は守るところを勉強します。たくさん家の家来で守つたところをやります。

○ 「…………」  
読んでおしまい。

七 よ む 時間  
一、よむ 七分  
二、とく 十一分  
三、よむ 七分  
四、かく 二分  
五、よむ 十二分  
六、とく 一分  
七、よむ 一分

明日は8のところです。帝が家来をよこして、守つてくれるところですよ。

所要時間の配当をみると、無駄なく、しかもたっぷりとつてあることに気付きます。

教式に示されている通りです。

二とくと六とくがきちっと同じであることは、なかなかできないことです。

私たちはとにかく二とくも六とくもできるだけさらっとやることに全力を注げばよいのですが、

筆録してみると、かなりな分量になるのは、師の御教壇の深さを示すものであります。

子どもたちの目が、いよいよ輝いてきました。師弟

一体となつた感じです。

### 板書事項



…

ひめ → ふたり

(わけ)

「わたしは、もともと

月の国」のものです。

この十五夜には、月の国からむかえが

くるので、おわかれしなければなりません。せん。それがかなしくて、ないしてるのでござります。」

ふたり → みかど

(わけ)(わけ)

「むすめをまもつてください。」

### 第二次指導（四時間目）

礼

### 一 よ む

昨日は学校で一所懸命勉強したね。家に帰つてもお勉強してみた人。読んできましたか。

全員掌手

みんなやつてきたか、よかつたね。今日は五、六、七、八と読んでもらいます。

○ 「—」

うん、冬のお月様は、こうこうとしてとっても美しいの。でも、寒くて外へ出て見ていられるか。

○ 「—」

見ていられないの。外へ出て、いい月だなあと見られるのはいつごろ？ 外へ出て、きれいな月を見られるのはいつごろ。

○ 秋

秋です。秋のお月様です。ことに十五夜のお月様はきれいでしよう。

みんなの家では、お団子やおいもなどをたくさん上げて、きれいなお月様の出るのを、みな待つててでしょう。

けれど十五夜のお月様が出るのを、いやでいやでしょうのない人があつたでしょう。みんなが待つてているのに、いやでいやでたまらない人がいたでしょう。

○ かぐやひめ

かぐやひめです。かぐや姫は十五夜がくるのがいやでいやでたまらないの。それで、毎晩毎晩泣いておつたの。何がそんなにいやだったの。

○ 冬のお月様です

雪が降り、ピューピュー冷たい風がふく冬の夜のお月様だろうか。

涼しくなつた秋の頃のお月様だろうか。

春の桜の花がさく、ぽかぽかと温かい頃だと思うか。

今頃のような暑い夏の夜のお月様だろうか。

一年中で一番お月様のきれいなのは、いつだろう。

今日の四人も大変うまかったね。しっかりした大きな声で、ゆっくりと読んでくれました。

聞き方も、毎日々々上手になるね。姿勢、そうやつて聞くと、とってもよくわかるでしょう。

○ 読む

二 と く

さあ、本をおいて下さい。

あなたからですね。あなたは五を読んで下さい。あなたは六、それからあなたは七、あなたは八と、あなたまで読むのね。それでは五のところを開いて下さい。さあ読んで下さい。

あなたからですね。あなたは五を読んで下さい。あなたは六、それからあなたは七、あなたは八と、あなたまで読むのね。それでは五のところを開いて下さい。さあ読んで下さい。

○ 読む

○ 冬のお月様です

○ 月の国へ帰るのが

月の国へ帰らなければならぬから、いやなのです。  
かぐや姫の生まれたところは月の国でしょう。生まれたところに帰るのが、何でいやなの。

- せっかく、おじいさんとおばあさんにお世話をなつたから。

おじいさんとおばあさんが、小さい時から大事に大事にして育ててくれたのね。そういうおじいさんや、おばあさんと別れるの、とってもいや。  
それじゃ、おじいさんとおばあさんはどうです。帰してやりたいの？ 帰してやりたくないの？

- やりたくない

かわいい、かわいい、かぐや姫です。おじいさんもおばあさんも、帰してやりたくないの。  
もう一人あつたじゃないか。帰してやりたくない人。

- みかど

帝も、日本の國から、そういう美しい娘を月の国へ帰してやるのは、おしいと思われたの。  
おじいさんも、おばあさんも帰したくない。帝もかぐや姫を帰したくない。心が合つたな。  
そこで、帝はどうなさつたの？

- 家来をつれて家来をよこして下さいました。  
その家来たちは何をしたろうか。  
おじいさんは何をしたろうか。

おばあさんは何をしたろうか。

八のところを開いてみなさい。どこに書いてあるかわかるかね。

帝の家来が……前から三行目のところに書いてあるよ。  
おじいさん おばあさんのことも書いてあるよ。それをさがして 帳面に書いて下さい。

### 三 よ む

### 四 か く

みかどのけらいが、  
たくさんやつてきました。  
そして、ゆみややかたな  
をもつて、家のまわりを

とりかこみました。

「どうか、いつまでも  
この家にいてくだ  
さい。」

おばあさんは、

かぐやひめをつれて  
くらの中にかくれ  
ました。

「だいじなむすめ、  
わたしてなるものか。」

おじいさんは、くら  
の前に立ちました。

(書く 十一分)

### 五 よ む

○ ○ 指點読 一回  
○ 指音読 二回

### 六 と く

ここは(帝の家来のところ)誰のやつたこと？

○ みかどのけらい(黄で)でくくられる)  
家来のやつたことです。それじゃ、ここは(おばあさん  
のところ)誰のこと。

○ おばあさん(黄で)でくくられる)  
それじゃ、ここは(おじいさんのところ)誰のこと。  
○ おじいさん(同様に)

帝の家来から、かこみましたを一つに(でまとめられ  
る。以下同様

帝の家来の仕事と、おじいさんの仕事と、おばあさんの仕事と、みんなの仕事の、受持が違うでしょう。同じことをやつたのではないでしょう。

帝の家来は、どこにおったの、おった所、違うでしょ  
う。  
鉛筆をおきなさい。本も帳面も閉じなさい。  
遅れた人も、心配しないで閉じなさい。  
机の中に静かに、音のしないようにしまいなさい。  
だんだん だんだん、仕事が早く上手になつてくるね。  
上手になつてくるし、体も真直ぐでとてもよいね。  
声を出さないで読んでみましょうね。

○ 家のまわり(そのことばのはとりに〇〇〇〇〇を)  
家のまわりです。おばあさんはどこにいたの。  
○ くらの中に(これにも黄で〇〇〇〇〇)  
倉の中にいました。倉の中でかぐや姫を守るのは、お  
ばあさんの役目。

それじゃ、おじいさんは、どこを守る役目?

○ くらの前です(同様に)

倉の前です。かぐや姫はどこにいるの。

○ くらの中

倉の中に、おばあさんと一緒にかくれているの。その  
前には誰がいるの。

○ おじいさん

おじいさんがいて、その家のまわりには誰が守ってい  
るの。

○ みかどのけらい

帝の家来がずう一つたくさんいる。

さ、それじゃ、とってもとっても、中に入ることな  
んか、できないじゃないか、それじゃどう考へても。

外には家来がいっぱい守っている。中へ入つて、倉の  
前には、おじいさんが守っている。倉の中へ入ると、お

ばあさんがしつかり守っているの。

ただとり囲んだだけじゃない。家のまわりの帝の家來  
たちは、とても氣味悪いもの持つてゐる、何?

○ 弓や刀

弓や刀を持つてゐます。向こうから(空の方指して)き  
たら、弓矢でパシッ、そばへきたら刀でパスッとやられ  
る。(打つまね、切るまね、をされる)

それでも中へ入つたら、おじいさんが倉の前でがんば  
つてゐます。

倉の戸はどうしていたと思うか。

○ ひとりでにあきました

倉の戸はどのようにしておつたか。

○ しめておきました

しめておきました。その上、がしゃんとこんな大きな

錠をかけて、何としてもあかないようにしておつたの。

倉の中にはいつておばあさんは、どうしておつたか。  
並んでいたか、どうしておつたか?

○ だいていました

おばあさんは、誰が来ても渡すものかと、かぐや姫を  
しつかり抱いていました。

倉の戸はびちんとしめて、大きな錠をガチャンとかけ  
て、倉の前ではおじいさんが、きたら押しもどそうとが  
んばつてゐる。

家のまわりには、弓矢や刀を持った大勢の帝の家來た  
ちが「きたら やるぞ!」(大きな声)と、がんばつてい  
るの。

おばあさん かぐや姫しつかり抱きながら、これ言つ  
たの。おばあさんの心がわかるのどこ。一番言いたいの  
どれ。

○ いつまでも(いつまでもに黄で□□)といつま  
でもいい下さいと、しつかり抱いていた。

おじいさんの気持のわかるのはどれかな。

○ 大事な娘を渡してなるものか

そのうちのどこ?

○ なるものか(を□でかこむ板書)

なるものかといふのは、渡すということか、渡さない  
ということか。

○ わたさない

絶対渡さないぞ。どんなことがあっても渡すものかと  
倉の前でがんばつてゐるの。

今日は一所懸命にやつたので早く終つたよ。

礼

七 よ む

時間	四分
一、よむ	
二、とく	六分
三、よむ	十一分
四、かく	
五、よむ	二分
六、とく	十一分
七、よむ	
一分	

## 板書事項

## 第二次指導（五時間目）

子どもたち、本を開いて読みながら始鈴を待っている。

始鈴

さあ、御本を置いて下さい。

静かに礼

さあ、皆さん、昨日まで毎日毎日、一所懸命勉強しましたね。昨日、家に帰つてから読んでみましたか。

全員挙手

かぐやひめをつれて  
くらの中にかくれ  
ました。

「だいじなむすめを、  
わたしてなるものか。」  
おじいさんは、くら  
の前に立ちました。

よかつたね。手を下しなさい。それだつたらよくわかつたでしょう。そのように、家に帰つて読んでみると、よくわかります。  
今日は六から読みます。六、七、八、九と読みます。  
あなたから六、あなた七、あなたが八、あなたが九と読みます。  
今日も大きい声でゆつくり読むんだつたね。聞く人もしっかりきいて下さい。

## 一 よ む

## 二 と く

本をおきなさい。とてもよい読みでした。とてもしつかりした読みだつたな。聞く人もしつかり聞いていたね。

秋の十五夜の晩に、月の国から迎えにくることをかぐや姫はいつ頃から心配しておつたか。

○ 秋  
？ 秋になつてからか。あなたは。

○ 春  
春からです。春から、毎晩々々月を見ると悲しそうな顔をしていました。春が過ぎて夏が来て、夏が過ぎて秋がやつきました。

いよいよ今日は十五夜の晩になりました。かぐや姫は、月の国へ帰りたいのか、それとも帰りたくないのだろうか。

○ 帰りたくない  
帰りたくないのです。おじいさんとおばあさんはかぐ

や姫を月の国へ帰したいのか、帰したくないのか。

○ 帰したくない  
帝はどうだつた？

○ 帰したくない  
帰したくありません。そこで、どうしても帰さないようと考えたな。

かぐや姫の一番近くで守つていたのは誰だつたか。

○ おばあさん  
おばあさんです。おばあさんは、かぐや姫をどこにかくしたの。

○ 倉の中  
倉の中へ連れていつて、しつかり抱いていました。  
倉の戸はどうしたか。

答 聞きとれず

かぎをかけたのね。（と答をうけられて）  
ビチーンとしめて、錠をガチャーンとかけた。これじ

やとてもあけられないね。  
なおその前には、おじいさんが、がんばって守つています。きたらつかまえてやろうと、しつかり守つています。これは家の中。